

友よ 第6回

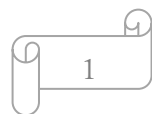
友よ
第六回

第二部
中富川

赤神
諒



第6章 土佐で好きなもの



友よ 第6回

主な登場人物

第二部

長宗我部信親

長宗我部家の御曹司。通称、弥三郎。

谷彦十郎

谷忠兵衛の嫡男。信親衆の一人。

るい

信親の母・滝に仕える侍女。

羽床資吉

讃岐の土豪・羽床氏の嫡男。信親衆の一人。

福留隼人

土佐随一の猛将。信親の武芸の師。

長宗我部元親

信親の父。土佐国主。

谷忠兵衛

元親の懐刀。元神官。信親の学問の師。

桑名太郎左衛門

長宗我部家臣。信親の弓と礼の師。

滝（石谷ノ方）

元親の妻。信親の母。

三蔵

信親に仕える三人の近習たちの綽名。

入江左門

元親に仕える謎の忍び。



漣

客将・石谷頼辰の娘。

十河存保

讃岐・阿波を領する三好家の当主。

赤沢宗伝

存保の軍師。

七条兼仲

存保配下の猛将。

仙石秀久

羽柴秀吉の家臣。

航八

岡豊の若い川漁師。

せせらぎ

死んだ一領具足・渡の娘。航八の幼馴染。

第六章 土佐で好きなもの

——天正十年（一五八二年）五月、丹波国・龜山城



かつてない危機が、長宗我部に訪れようとしていた。

桑名太郎左衛門は明智家の家人に導かれて、龜山城本丸へ向かう。見事な石垣の向こうには、壮麗というより堅固な五層の天守が聳えていた。織田家の宿将・明智光秀の居城だ。

桑名は姿形こそ土佐和紙を売り込む実働屋の従者だが、実際には長宗我部家の密使である。逸る心は、不安と期待で慄えていた。

案内された四階の狭い一室へ入ると、北に遠く桂川の流れが見えた。『土佐日記』にも記される名川を前にすれば、信親は苦手な歌の一首でも詠むだろうか、ふと思った。

「さてと。明智様はいかに出られやすかねえ」

桑名は実働屋のやぶにらみの平たい顔を見やった。長宗我部が滅びれば大損するはずだが、他人ごとのような言い草だ。

土佐を震撼させたへ波川の乱から一年余り、長宗我部軍は動かなかった。いや、動けなかった。乱後の国情安定の要に加え、かねて誼みを通じてきたはずの信長が妨害したためである。

早くから元親は、日の出の勢いを見せつける織田家との衝突を懸念し、和親の道を探ってきた。正室の石谷ノ方が、光秀の腹心・

友よ 第6回

石谷頼辰いしがいよりとぎの義妹にあたる縁を頼り、光秀を通じて外交を展開した。その甲斐あって信長は、誼みを求める長宗我部に対し、「四国の儀は元親、手柄次第に切り取り候へ」と朱印状を与え、事実上の同盟を結んでいた。

ところが一昨年、波川の乱の余燼よじんいまだ冷めやらぬころ、「大坂本願寺の降伏は近い」との見立てが囁かれ始めると、事情が大きく変わってきた。光秀は「今、四国で兵を動かし、信長を刺激するのは得策でない」と忠告してきた。やむなく元親は、制覇した四国半分の国力を充実させる方針を取ったが、信長がついに本願寺を屈服させると、雲行きはますます怪しくなった。

「今や天下も、長宗我部も、明智様次第でございやすな」
桑名が答えなかったせいか、宍喰屋は自分で言葉を足した。が、咳きにしては、話が重すぎる。

この企てが成功すれば大儲けできようが、すでに巨富を築いた豪商を動かすのは、もはや金ではあるまい。商人でありながら、天下の趨勢すうせいを決める場に居合わせる事が、虚栄心を擦くすくっているのであるう、さも満足げな顔つきをしていた。

畿内の動向に焦りを感じた元親は、光秀を通じ、改めてへ切り取り勝手への朱印状を持ち出し、兵を起こそうとした。

しかるに信長は、あっさりと掌を返した。

土佐一国と阿波南部の領有は認めるが、讃岐と伊予の支配地を「返

友よ 第6回

上」するよう、正式に求めてきたのである。三好家を継いだ十河存保が、曾祖父の弟にあたる一族の梟雄三好笑岩と共に、羽柴秀吉を通じて信長に泣きつき、秀吉が光秀に勝利した結果だった。

長宗我部は一貫して低い物腰で織田との和を求めてきたが、服従した覚えはない。元親が無体な要求を拒否すると、信長は待っていたかのように四国征討の準備を始めた。三好方は、織田軍の先鋒と化し、阿波で反攻に転じて、長宗我部方の城を奪還し始めた。

光秀の使者として石谷が岡豊城へ遣わされ、和平を説いたが、元親は聞き入れなかった。中国の毛利も、織田と熾烈な戦いを続けている。越後の上杉、甲斐の武田もまだ織田に屈してはいない。大連合を組めれば、戦い方次第で勝機があると、元親は見ていた。

だが、この三月には武田家が呆気なく滅ぼされ、織田軍は毛利領と上杉領へそれぞれ猛然と侵攻している。

安土にあって信長は、四国遠征の軍を起こした。総大将は三男の織田信孝、副将は宿将・丹羽長秀である。すでに信長は讃岐を十河存保に、阿波を三好笑岩に与えると約したと伝わっていた。

事ここに至り、長宗我部にとって起死回生の策は、一つしかなかった。

「明智様は律儀なお方ですから。自分を信じて隠忍自重してきた長宗我部家の滅亡を、ただ指をくわえて眺めておられるとも思えませぬ」

友よ 第6回

光秀は丹波攻略の際、降伏すれば助命するとの約束を信長に反故ほごにされたせいで、人質に差し出していた老母を敵に殺されていた。徳とく川家康の饗応きやうおうでも面目を潰される酷い仕打ちを受け、信長との不仲が囁かれている。

元親は忠兵衛と諮ったうえで、石谷を通じてひとつの策を光秀に打診していた。

——信長を討ち、共に天下を取らん。

この間、石谷と桑名は足繁く土佐と丹波を往来し、談合を重ねてきた。企てがこれ以上遅れたなら、長宗我部は滅びる。中国遠征のため羽柴秀吉が、越後遠征のため柴田勝家しばたかついえが、さらに四国遠征のため丹羽長秀が畿内を留守にする今こそ、二度とない絶好の機会だ。

「駄目なら、土佐へ戻って、おとなしく戦をするまでじゃない。形勢は不利だが、毛利と共闘できれば、まだ負け戦だと決まっ

てはいない。」
「大戦で儲けるのは、勝った側に味方した商人だけじゃとは、限りやせんがね」

ちらりと視線を寄越す穴喰屋のやぶにらみに、桑名は背筋が寒くなった。どういう意味だ。

「ご安心を。つまらん武士よりは、失う富を持つ商人のほうが、よほど信じられやすぜ」

穴喰屋がにんまり笑った時、廊下に足音が聞こえ始めた。

友よ 第6回

桑名は居住まいを正す。

明智家の家人が音もなく襖ふすまを開けた。

髪に白いものが混ざり始めた壮年の将、石谷頼辰は、あくまで穏やかな物腰だが、実弟の齋藤利三さいとうとしみつと共に明智家を支えてきた歴戦の将である。

意志の強さを感じさせる唇は、それだけ見れば明らかに太すぎるが、公家さえ思わせる整った顔立ちをかううじて壊しはせず、かえって石谷らしい精悍せいかんさを醸し出している。齡は離れていても、何度も会ううち肝胆相照かんたんらす仲となり、他家の家臣でありながら、同志にも似た絆で結ばれているのを、桑名は感じていた。敬い、信ずるに足る男だった。

桑名は食い入るように石谷を見つめたが、表情からは首尾が全くわからない。

美濃齋藤氏の一族に生まれ、婿養子として室町幕府奉公衆の名門を継いだ石谷は、かつて將軍足利義輝あしかがよしてるのそば近くに仕え、幕府再興を夢見ながら、ついに果たせなかった。信長が將軍家を滅ぼすさまを断腸の思いで眺めていた石谷にとって、信長は仇とも言える。

「石谷殿。天下は、いかが相成りましようか」

桑名の問いに、石谷は厳しい顔のまま、頷いた。

「わが殿がついに決断されました。龜山城出陣に合わせ、必ずや事を成し遂げる、と」

友よ 第6回

後ろで、珍しく穴喰屋が息を呑む気配がした。

「では……」

「いかにも。土佐で吉報を待たれよ。事が成就せし後は、わが明智を四国より助けられたし」

「ありがとうございます」

感極まって涙がこみ上げてきた桑名は、泣き顔を隠すように両手を突いて頭を下げた。

——これで、長宗我部は救われる。

石谷は桑名を助け起こすと、手を取って大きく頷いた。

「これからが正念場でござるぞ」

桑名も、石谷の手をしっかりと握り返した。

まもなく、畿内に激震が走る——。



「入江左門いりえさもんからの急ぎの報せでは、明智方は山崎の地で敗れ、光秀公も命を落とされた由」

深更しんこう参上した忠兵衛が言上すると、さしもの元親も慌てた様子で呻うめき声を出した。

「誰が、勝ったのだ？」

「羽柴秀吉にございます」

明智家の使者が岡豊城を訪れ、光秀が本能寺で信長を見事に討ち果たしたとの吉報が届いたのは、わずか十日ほど前の話だった。

友よ 第6回

長宗我部は救われた。皆がそう、思った。

信長亡き後の畿内の情勢も、今後の毛利の出方も読めぬが、長宗我部はあたう限り早く四国を固め、光秀と緊密に連携しつつ、明智の旗の下に集う諸将らと共闘するはずだった。ところが、中国戦線にいた秀吉が信じがたい大返しを演じ、光秀を討ったのである。

元親は顔に苦渋を浮かべながら、細い指先で短いあご髯ひげをゆっくりとしごいている。

「長宗我部は誰と、組むべきか……」

畿内の情勢は、混沌を極めつつあった。

一寸先は闇の中だが、勝ち馬に乗らねば、悔いを千載せんざいに残す。

信長の後継者とされていた嫡男信忠のぶただも光秀に討たれたため、織田家には信長の後を継げる者が見当たらなかった。次男信雄は愚昧で知られ、三男信孝もさしたる人物ではないらしいが、柴田、丹羽、羽柴の三人の宿将が担ぎ上げた後継者が力を持つだろう。上手に動けば、織田家が分裂していがいみ合っているうちに、長宗我部も力を付けられる。

「毛利が羽柴と結ぶとなれば、羽柴との誼みも頭に入れるべきかと」
中国大返しで、毛利家の宿将小早川隆景こばやかわたかかげは、退却する秀吉の背後をなぜか襲わなかった。長宗我部にとっては、毛利も強敵である。秀吉と事を構えれば、毛利をも敵に回しかねない。

「秀吉との和は、容易ではあるまい」

友よ 第6回

三好方と繋がる秀吉は、かねて長宗我部に好意を持っていなかった。他方、家中でも、光秀と連携してきた桑名などは、光秀を討った秀吉との交誼こうぎに猛反対しよう。だが柴田か、丹羽でよいのか。

「羽柴家ゆかりの姫を、若殿のご正室に迎えられては如何？」

秀吉に子はいないが、最有力の将の姫なりを養女として迎えさせ、縁組により秀吉との良好な関係を築くべきだと忠兵衛は説いた。今なら、秀吉と三好の間に楔くわくを打ち込めはせぬか。

「お許しあらば、入江に探らせ、身どもが話を進めて参りましょう」

織田の有力家臣たちが相争うなら、短時日で誰か一人の手に畿内が落ちる結末はないはずだ。そこに付け込む隙はあるう。

「……秀吉は、好かぬな」

光秀を信じ、共に夢を描いてきた元親は、秀吉と手を結びたくない様子だった。血筋に対する元親のこだわりもあったろう。長宗我部家は秦の始皇帝の血を引くと伝わるが、秀吉は百姓の出だ。

「とにかく若殿には、兵を速やかにお戻しあるよう、文をお書きくださりませ。組む相手を決めるまで、動くべきではありませんぬ」

本能寺の変を知るや、信親は元親の居館へ直談判に訪れ、阿波攻めの好機だと説いた。この機に一挙に四国を征すべしと唱え、先に阿波入りすると公言し、信親衆の一部を率い出陣していたのである。

信親は波川の乱以来、元親と疎遠になりはしたが、長宗我部による四国統一を強く願うようになっていた。信親たちは今、香宗我部親泰こうそがべちかやす

友よ 第6回

のいる海部城かいぶじょうにある。秀吉との和平に道を残しておくなら、今、三好を攻めるのは得策でなかった。

「よかろう。入江には引き続き、畿内の様子を探らせよ。信親の嫁取りの件も、頼む」

長宗我部が誰と結ぶのか、今はまだ誰にもわからない。



真夏でも日のまだ昇りきらぬうちなら、石清川いわしがわの辺ほとりは涼しい川風のおかげで心地よい。

「漣みづ殿は、川が好きなのか？」

信親はさりげない口調で少女の背に声を掛けてみた。

出丸から川を眺めていると、三日月淵の辺に柳色の小袖を着た姿を見かけるようになった。

慌てた侍女が「姫」と声を掛けても、振り返った漣は、心ここにあらずの表情をしていた。るいとは違う面長な顔つきで、肉厚な赤い唇にはごく自然な艶があった。物憂げだが、信親の母滝母滝にも少し似た美しい少女には、初めて会った時から胸にざわめきを覚えていた。漣は客将・石谷頼辰の娘であり、信親の母方の従妹に当たる。齡は二つ下の十六だった。

微笑みながら漣の答えを待っていると、ようやく厚めの唇が開いた。

「桂川は好きでした。でもこの川は、きつと大嫌いになると思います」

友よ 第6回

信親は吹き出した。ずいぶん変わった女子だ。

「そういえば、桑名が桂川を見たとき自慢しておったな。俺もいつか行って遊んでみたいが、この石清川も実によき川ぞ。どこが、漣殿の気に入らぬ？」

不満げに突き出された唇から、遠慮のない呪詛が漏れ始めた。

「今のわたくしには、見るもの触れるもの、何もかもが気に入らぬのです。すべてを失って都落ちしてきた地を好きになれるとでも、お思いなのですか？」

明智家が秀吉に滅ぼされた後、石谷はかろうじて生き残った一族郎党を連れ、長宗我部を頼って落ち延びてきた。

家中には忠兵衛を筆頭に、今後の畿内における展開を見据え、敗者の遺臣受け入れを懸念する声もあったが、長宗我部のため骨を砕いてくれた経緯に鑑み、元親は桑名の進言を容れ、義兄に当たる石谷を岡豊へ迎え入れたのである。

信親にとって、石谷は義理の伯父である。主家を滅ぼされた境涯にも同情を禁じえなかった。さっそく信親が三蔵に指図し、石谷を歓迎しようとして出丸で宴を催したのは十日ほど前で、彦十郎や隼人、桑名たちが顔を出した。宴も酣たけなわになった頃、石谷が妻子を紹介したいと宴席に呼んだのだが、それがちよつとした事件になった。

若い長宗我部侍たちに賑やかに囲まれ、酒も入ってほろ酔いの石谷に対し、漣は聞こえよがしに冷然と詰問した。

友よ 第6回

——父上は尾羽打ち枯らして、古より名高き流刑るけいの地に落ち延びた御身で、よくも恥ずかしくありませんね。

座が静まり返って呆氣にとられる中、漣は「こたび、都落ちして参りました石谷の娘でございます。煮るなり焼くなり、どうとでもなさいます」と言い捨てるなり、踵かかを返して場を去ったのである。

石谷は娘の非礼を詫び、漣は主君明智光秀の嫡男で、幼馴染の光慶みつよしに嫁ぐことが内々決まっていたのだと明かした。光慶は父の死を知ると、家臣たちと共に自害したと伝わっていた——。

すっきりした顔立ちこそ綺麗だが、信親は最初、漣を苦手だと思った。だが、毎日のように川を眺めに来る姿を見て、関心を抱いた。

「土佐は良い所だぞ。俺は生まれ変わっても、再び土佐に生まれたい」
漣はうんともすんとも返事せず、石清川の絶え間ない流れを眺めている。

「どんな小さなことでもいい、土佐を好きになろうと思ってくれぬか。好きなものができれば、必ず生きていて楽しくなる」

聞いているのか、いないのか、漣は川面かわもを見つめたままだ。横顔を見ていると、頑固そうな厚い唇が少しだけ開いた。

「恥を晒して生き延びる人生に、この先どんな喜びがあると仰るのですか」

ぽそりと聞こえてきた漣の声は、かろうじて川音に掻き消されな

友よ 第6回

いぐらいの囁きだった。

「人生は、死ぬためではなく、生きるためにある。死ぬばそこで終わりだが、生きてさえいれば、まだ変えられる」

信親は半歩、漣のそばへ歩み寄り、石清川の真ん中を指差した。

「川の中でキラキラ輝いているものが見えるか？」

返事はない。それでも、信親は続けた。

「あれは、群れで泳ぐ魚たちの鱗だ。生きている証とも言える」

信親は両手を水に入れると、群れに向かってバシャバシャ水を掛けた。たちまち群れは散ったが、また別の場所で輝き始める。

「なあ、漣殿。俺はお父上を見上げたお人だと思っている。斎藤利三殿のように潔く主家に殉じて死ぬるも、武士の立派な生き方だ。されど、周りの人間はどうなる？」

利三も、信親にとって、石谷頼辰と同じく母方の伯父にあたった。

斎藤家の滅亡を受け、辛うじて生き残った幼子たちも、長宗我部家を頼って岡豊城にいる。特に末娘のお福（後の春日局）は、（波川の乱）で弥次郎と共に死んだお福と名が同じせいもあって、信親も大いに可愛がった。よく懐き、出丸にも遊びに来る。

「己の死によって大切な人たちを守るのなら、もしも他に道がないのなら、俺も命を捨てる。だが、死んだとて守れぬのなら、たとえいかなる汚名を被ろうとも、俺は生きたい」

ちらりと漣の横顔を見たが、固く結ばれた唇が解ほどけそうな気配は

友よ 第6回

なかった。

「俺は母上が大好きでな。その母上のお身内と、こうして同じ土佐で暮らせるとは思わなんだ」

「土佐を好きになるとしたら、何から始めればよいのですか？」

「自慢はたくさんあるが、俺ならまず、川だな」

「海ならともかく、川なんて、どこにだってあります」

「もちろん海も好きだが、川とは違う。米と麦ほどにな」

漣が分厚い唇を尖らせる。

「われながら譬えが冴えぬか。つまり、似ているが違うのだ」

例えば川には、対岸がある。空だけでなく、彼岸も此岸も川面に影を落とし、海より浅い川底も、色作りに参戦してくる。だから川は、実に様々な色を帯びるのだろう。

「色だけではない。日により場所により、季節により天気により、川の流れも、風も恵みも、匂いも煌めきも、魔法のように変わる。寄せては返す波とは違う。一度流れ下れば、二度と戻らぬ潔さもいい。俺はすべての川が好きだ。土佐には数えきれんほど川があって、それぞれが全然違う」

漣は表情ひとつ変えないが、聞いてはいる様子だった。

「魚を見るなら、夜もいい。素早い魚も、夜は動きが鈍るからな。鯰も鰻も、昼は隠れて夜に動くゆえ、そいつらも見られる。松明だと逃げてしまいが、月明かりなら、楽しめるぞ」

友よ 第6回

川談義を嫌いではないように見えた。調子に乗って、信親は続ける。小川や井手にも色々な楽しみがある。大雨の後など、川底に砂の波が現れ、左右交互に綺麗な形の波ができたりする――。

「川には猿猴えんこうもいるぞ。おらぬと言ひ張る連中もいるが、俺は必ず見つけるつもりだ」

「猿猴を見つけて、何をなさるのです？」

「友になりたい。俺も猿猴も大の川好きだからな。仲良くなれるに決まっている」

澪が呆れたような顔をした。猿猴などいないと思ひ込んでいるに違いない。

「俺が川好きになったのは、渡という一領具足いちりょうぐそくのおかげでもある。俺の友でな」

「信親さまは、足軽を友垣ともがきになさるのですか？」

澪が物珍しそうに信親を見ていた。

「何か、変か？」

「いえ、わたくしの存じ上げていた御曹司とは、ずいぶん違うものですから……」

「御曹司というのは、実に損な役回りでな。下手をすると、父親は主君で、家族までみんな家臣になってしまう。だが生涯、友もなしに生きるなど、寂しいではないか」

澪は厚い唇を尖らせながら、珍獣でも見るような顔つきで、信親を

友よ 第6回

見ていた。

「変わったお方。川の話ばかりなさる御曹司も、世にはいるのですね」

「誰だって好きなものはある。川のことなら、何でも聞いてくれ」

信親が胸を張ると、漣が真顔で尋ねてきた。

「では、ひとつだけ。この川は、どこが一番深いのですか」

漣らしい、おかしい質問だった。



信親の必死の呼びかけに応えるように、漣が軽く呻きながら、うっすらと目を開いた。

「おお、気が付いたか。夏の川でよかった」

漣はぼんやりしていたが、やがて艶のある厚い唇を動かした。

「まだ、生きている……」

「そうだ。助けるのに苦労したぞ」

石清川へ入水した漣を助け出して介抱した。唇から懸命に息を吹き込むうち、漣が水を吐いたため、いつか渡から教わったように、顔を横に向けて吐かせた。

「助けて欲しいと、頼んだ覚えはありません」

今ばかりは、漣の強がる声も弱々しい。

「そいつは、すまなんだな。だが、俺が助けたかったのだ」

漣はおやっとした顔で、信親を見た。

「……どうして、おわかりだったのですか？」

友よ 第6回

「いつか渡わたが言っていた。川好きでもないくせに、川を何日も眺めている人間は、入水を考えてるんだってな。二、三度、助けたこともあるそうだ」

信親は毎朝、石清川の辺ほとりにいる漣せの姿を見ながら稽古しごをするうち、明け方、大橋へ行く漣せに気付き、心配になった。漣せが城門を出ると、三蔵の誰かを行かせて、密かに見張らせていた。今日が三日目だった。「その渡とやらのせいで、わたくしは死にそびれたのですね。文句を言ってやりたいくらいです」

漣せの言葉には棘とげが含まれている。

「そいつは難しかろうな。四年前の俺の初陣で、渡は俺を守って、身代わりに死んだ」

ハツとした顔で、漣せが信親を見た。

「渡には幼い愛娘もいた。まだまだ生きてかっただろう。俺と一緒に、四万十川しまんとがわで幻の赤目を釣って食うつもりだったからな。猿猴さるまぎに会いに行く約束も、果たせずじまいだ」

漣せが気を取り直したように、口を尖らせた。

「信親さまを取り巻く方かた々は、お節介な人ばかりですね。桑名様は何度も羊羹ようかんを持ってお見えになります。食欲がなければ、どれだけ好物でも、たまってゆく一方ですの……」

桑名は石谷家の没落に心を痛め、暇を見つけては屋敷を訪れているらしい。明智家が長宗我部の懇願で〈本能寺の変〉を起さなければ

友よ 第6回

ば……と責めを感じている様子だった。

「具合が良くなるまで、ここで休んでいるがいい」

立ち上がる信親の足元から、ぼそりとした声が聞こえてきた。

「御礼は、申しませぬ」

「ああ、俺が勝手にやったことだ。ときに溲殿は、伯父御の気持ちを考えてことがあるか？」

信親は妹に諭すように、穏やかな口調で続けた。

「子が親に先立つのは、一番の親不孝だ。順番は守らねばな」



禪一丁で逞しい裸身をさらす信親が、川底を真剣な表情で睨んでいた。何かいるらしい。

溲はそっと忍び寄る。

川面の水を両手ですくい、信親にバシヤバシヤとかけた。

「な、何をするんじゃ！」

信親が引き締まった腕で、顔に掛かった水を拭いている。

「先ほどの仕返しでございます」

信親は川遊びをすると宣言したものの、溲が「泳げません」と言うのと、ひどく困った顔をして、結局、水かけ遊びをすることになった。だが、信親のほうが腕も長く、掌も大きく、何より猿猴のように川に慣れている。おかげで、溲の白小袖はびしょ濡れになったが、冷たくて気持ちよかった。「川へ行くと、大人も子供になる」と言うが、

友よ 第6回

信親はまさにそれだった。漣も、同じかも知れない。

「鯨がおったゆえ、見せてやろうと思うたに……。三蔵も鯨を見て、川好きになったのだ」

やはり信親は少し変わっていた。いつも、自分以外の人間のことは
かり考えている。

「さように気味の悪い生き物、見たくもありません」

気がつけば、心にもないことを口走っている。漣は最近の自分が大
嫌いだ。

「けれど、鯨に会ったことはあるまい」

確かにその通りだが、絵で見た鯨は好きでなかった。

「見なくてもわかります」

「鯨はこんな顔だぞ」

信親は漣のほうを見て、切れ長の目を大きく見開くと、口をへの字
に曲げ、大きな指で髯らしきものを作った。美男が出し抜けに見せた
変な顔に、漣は吹き出した。

「面白い顔に立派な髯が付いておってな。なかなか愛嬌がある。ち
ゃんと見れば、そなたも気に入ったはずだ」

しきりに悔しがる信親が気の毒になって、漣は笑うのをやめた。

「初めて笑ったのう、漣殿」

本当だ。土佐へ来てから、笑うのは初めてだった。

信親は白い歯を見せて笑いながら腰に手をやると、分厚く逞しい

友よ 第6回

胸を張った。

「どうだ、漣殿。これが仁淀川だ。によどがわ綺麗だろう？」

これで五回は同じことを言っている。漣は呆れ顔を作って応じた。

「ですから、綺麗ですねと、何度も申し上げているではありませんか」

信親の言葉には嘘が全くないことに、漣は気付いていた。

入水した日から、信親は必ず日に一度は、漣に会いに来た。相変わらず川の話が多いが、三蔵たちや信親衆の面々も連れてきて、面白おかしく話をさせる。漣を何とか笑わせようと、懸命になっていた。石谷家は城南の空き屋敷に住んでいたが、まもなく城北へ移る。引越した後も、信親は会いに来てくれるのだろうか。

漣は空を見上げた。

信親が繰り返すように、土佐の夏空の青さは、どれだけ見ても飽きない。

——漣殿、川へ行かぬか。

屋敷へ来た信親に声を掛けられたのは、昨日の朝だった。晴天続きだから、仁淀川は青い。きっと土佐を好きになれると意気込んでいた。釣った鰻を土産に持ち帰って、近ごろまた寝込みがちな石谷ノ方に食べさせたい、とも言っていた。

断る理由もすぐに見つからず、漣が軽く頷くと、信親は直ちに出丸にいた若者たちに声を掛けた。漣が馬は苦手だと言うと、「俺の後ろに乗ればよい」と言われて、信親の背にしがみつくことになった。道

友よ 第6回

中、信親が急ぐ理由を知った。

すでに讃岐の長宗我部軍は、四国統一に向けた戦を再開しており、遠からず土佐からも出陣するという。別れは突然訪れると、丹波で知った。戦では何が起こるか知れぬから、出陣前に無理に時を作ったわけだ。

昨日は長宗我部家の直領である波川の館に泊まった。明け方に城を出、ひたすら仁淀川を遡さかのぼって溪谷に着いたのである。

今まで漣は、これほど豊かな森の奥深くを訪れた経験がなかった。青空の下、緑の森に囲まれて、滝も淵も、溪谷も洞穴も、従兄の御曹司も、漣には何もかもが輝いて見えた。ふだん出丸に出入りしている若者たちのほか、警固の者たちも従ってきたが、信親と自分以外、誰もいなければいいのに、と思った。

視線を川へ戻すと、穏やかになった水面を信親が眺めていた。

すぐ近くの浅瀬は透明で底まで見えるが、深みへ行くにつれ、緑になり、青になり、色がどんどん深まってゆく。

かくも美しき川を、漣は見たことがなかった。

「これが、美しく濁った青か。やっぱり、仁淀川は綺麗だな……」
今日、何度目だろう、あんまりしつこいと文句を言おうとした時、漣はハッとした。

若者の頬に、ひと筋の涙が流れている。

仁淀川は久しぶりだと、信親は言っていた。

友よ 第6回

かける言葉を探していると、信親が突然、鯰のいた淵へ身を投げた。大きな水柱が立つ。

信親はしばらくそのまま、水面にうつ伏せで浮かんでいた。

澪が少し心配していると、突然、勢いよく立ち上がった。

もういつもの笑みに戻っている。だが笑顔の裏で、この若者も乱世の悲しみを背負っているに違いなかった。

「家中では俺が一番長く潜れる。それでも、海女あまには勝てんがな。さあ、澪殿。もっと上流を探検するぞ」

どちらかと言うと、澪は身体を動かすのが苦手なほうだ。

「深い淵もありそうですし、先ほどは濡れた岩で滑りそうになりました。自信がございませぬ」

「そうか。ならば——」 信親は腰をかがめると、いきなり澪を横抱きにして抱え上げた。

「これで良からう。俺が連れて行ってやる」

遅しい裸腕のなかで、澪は体の芯が熱くなるのを感じた。

信親は川の中をずんずん進んでゆく。

苔むした崖の間を歩き、一緒に滝壺を覗き込んだ。

岩場を越え、川原に奇岩が見えてくると、澪は信親の腕から降ろされた。

「あれ？ あの鳥は、何でしょう？」

信親の後ろの木の枝に、虹のように鮮やかな色の羽をした小さな

友よ 第6回

鳥が止まっている。

確かめてから、信親がまた胸を張った。

「美しい小鳥であろう。緑、黄、青、赤、白、黒に水色。体に八つも色があるから、八色鳥やいろちようと呼ぶ。土佐自慢の鳥だ」

漣は「色をもう一度仰ってくださいまし」と、色を指折り数える。

「全部で七つしか、色がありませんが……」

「変だな」 信親も大きな手で色を数え直すが、やはり七つだ。

枝上の小鳥は素知らぬ顔で、ツンとしている。

「もう一つ色があったはずだ。捕まえてみれば、わかる」

信親はそっと木に近づき、いきなり跳び上がった。

が、素手で捕まるはずもない。八色鳥はさっと飛び立っていった。

「無念、惜しかったな」

惜しくとも何ともない。

しきりに悔しがる信親の姿が微笑ましかった。

「色の数はともかく、わたくしは好きです」

「そうか。やっと土佐で好きなものができたな」

信親が白い歯を見せて笑っている。

「きゃ、これは！」 漣は驚いて信親にしがみついた。

どこから来たのか、細長い茶色の獣が素早く漣の足元を横切って、川の中へ飛び込んだ。

「いたちが、水の中へ……」

友よ 第6回

「ああ、あいつは川獺だ。かわうそいたずらものでな。せっかく釣った魚を横取りしたりする」

川に潜った川獺が顔だけを出して、また潜ってゆく。

「可愛らしい……」

「猿猴と違って、川獺なら、土佐に幾らでもいるぞ。毛皮欲しさに殺す連中もいるがな」

漣の白い腕は、信親の裸の胸に載ったままだ。

ドギマギして、信親から離れた。

「また、土佐で好きなものができたな。漣殿をもっと土佐好きにしてやろう。待っておれ」

信親がまた川の中へ飛び込んだ。川獺を捕まえるつもりらしい。

無理に決まっている。

何事にも一生懸命な若者の姿に、漣は心が温もるのを感じた。



六

やはり川獺も逃がした後、二人は下流へ戻ってきた。

滝のある岩場では、無愛想な顔つきの若者が書物を読みながら釣り糸を垂れていた。谷彦十郎だ。滝壺は意外に鰻がいると言う。

脱ぎ捨てていた水色の小袖を信親が身につけると、漣も畳んで置いておいた小袖を羽織った。

「何と、まだ一匹も釣れておらぬのか、彦十郎？」

魚籠びくを覗き込んだ信親が、驚きの声を上げている。

友よ 第6回

「釣りは相手のある話。焦りは禁物でござろう」

川好きの信親は、しきりに川の幸を自慢するくせに、捕るの^のは他の者に任せて、もっぱら食べる役らしい。釣りは辛気臭いから嫌だと周りには言っているが、本当は蚯蚓^{みみず}を針に引っ掛けるのと、魚を絞めるのが苦手なのだ、漣にはこっそり明かしていた。

「弱ったな。漣殿に、土佐の鰻を味わわせねばならぬのに。知恵と駆け引きで、お主が鰻ごときに負けはすまい。頼むぞ、土佐の名誉が懸かっておる」

「雨の後か、日暮れなどは釣れやすいそうぞござるが、せいぜい相務めまする」

「知っておるか、漣殿。鰻は岩場を登ってゆくのだ。こうして身をよじらせながら――」

腕を鰻に見立てて実演する信親を、彦十郎が手で鋭く制した。

「若、静かにしてください。騒げば、魚も驚いて逃げ申す」

信親は頭を搔きながら、小声で尋ねた。

「資吉たちは何をしている？」

「ここに鰻はおるまいと、さらに下っていききました。じきにここへ戻りましょうが」

「俺が様子を見て参る」

足早に信親が去ると、漣は彦十郎と二人になった。

頼りになる軍師だと信親は言うが、愛想笑いもせず、とっつきにく

友よ 第6回

い若者だった。

「谷どの。上流のほうは信親さまも初めてなのですか？」

「この辺りまで遡ったのは初めてでござろうな。以前から皆で来たいと何度も仰せであったが、今日は格別の思いがあるはず」

漣が首を傾^{かし}げて問い返すと、彦十郎は続けた。

「若の仲の良い従弟に、仁淀川の好きな者がおりましてな。案内したいと繰り返すゆえ、若も必ず行くと約束していたのでござる」

「そのお人はどちらに？」

信親の仲間たちを漣はまだ全員知らないが、今日は案内してくれる者も特にいなかった。

「波川弥次郎と申す気の良い若者にて、とっくに三途の川は渡ったはず。まだ便りは寄越しませぬが」

漣は今ごろ気付いた。噂に聞くへ波川の乱で死んだ従弟との約束を果たすために、信親はここを訪ねたのだ。次の戦から生還できるとは限らないから、急いだのだろう。

「つかぬことをお尋ねいたしますが、信親さまが以前、石谷ノ方の侍女に恋をなされたという噂を耳にしました。今でもその女性^{にょしきょう}を思っておられるのでしょうか」

「はて、存じませぬな。知っておっても、どのみちお答えはいたしかねるが」

下流から賑やかな声が聞こえてきた。

友よ 第6回

「彦十郎。資吉は五匹も釣っておったぞ」

わらわらとやってきたのは資吉たちである。抜群ちようかの釣果ちようかに、さも得意げな顔つきだ。

「世は思うに任せぬことばかり。ここは失敗でござった」

「ふてくされるな、彦十郎。誰が釣っても、皆で食うのだ。ちゃんと分けてやる」

「若が釣られたわけでもありませんまいに」

彦十郎が低い声で応じると、「そいつはそうだ」と信親が笑う。

皆が続き、澪も笑った。信親とその周りの若者たちは、遠慮がない。

一緒にいて楽しい、と感じた。

だが、澪はひとり、笑いを止めた。

土佐へ逃れた身内以外の一族は、ことごとく秀吉に殺され、死に絶えたというのに、幸せを感じてよいのか。後ろめたさを感じるのは、共に滅ぶ道を選ばなかったせいかな。



七

破却された波川城の麓、旧波川家の館で催された宴も果てて、皆はすっかり酔っ払い、寝静まっていた。あの悲劇を忘れるために皆、勢いよく飲んだ。彦十郎さえも、だ。

信親は目が冴えて眠れず、川べりの庭へ出た。

仁淀川の川面のさざ波を、白い月影が人知れず照らし出している。

「弥次郎、美しく濁った青を確かめてきたぞ。次は、四万十だな」

友よ 第6回

あえて声に出したのは、もしもまだ、友の霊がこの地にとどまっているのなら、聞いて欲しいと思ったからだ。

夜風が清々しいのは、きっと仁淀川を渡ってくるせいだろう。

眠れぬ理由はわかっていた。るいの時と同じだ。

信親は漣に恋し始めているらしい。漣が京から来るまで、信親は「直ちに阿波を攻めるべし」と息巻き、信親衆を連れて阿波へ出向いてさえた。弥次郎との約束を果たし、何としても四国を統一したいと願ったからだ。結局、元親と忠兵衛に諭されて思いとどまったが、今は漣のことばかり想っている。

漣は館内の別室で、一人で寝やすんでいた。疲れ切って、眠りこけているに違いない。

仁淀川の青に輝く肢体の白さが、まぶた瞼の裏に焼き付いていた。川の中で濡れた身体を抱き上げた時のなよやかな感触まで腕に蘇ってくる。見た目はか弱そうで可憐な乙女だが、肉厚の赤い唇から遠慮なしに出る、気取らず飾らぬ言葉がいい。捨て鉢にも似た強がりにも痛々しさを感ずるが、余計な節介だとわかっていても、少しでも土佐に馴染み、人を好きになる心を取り戻してほしいと思った。川獺を見つけて喜ぶ漣の姿にふと、子猫を可愛がる、いの姿を思い出して、重ね合わせもした。

一方で信親は、亡き従姉弟たちの故郷で感じる恋心が、後ろめたかった。そもそも長宗我部の御曹司が、落武者の石谷家の娘を娶めとるなど

友よ 第6回

ありえまい。この恋もまた、成らぬ恋だ。そう思うと、いっそう澪を恋しく思った。だが信親はすでに、い、の件で学んでいる。この恋はずつと秘めたままでもいい。そう、心に決めた。

背後で衣擦れがし、「信親さま」としつとりと響く声があった。

「今日は本当に楽しゅうございました。御礼申します」

振り向くと、白い夜着に間着を羽織る澪がいた。

人生は不思議な縁で出来あがっている。土佐の幼馴染の従姉弟たちが永遠に失われた代わりに、はるか遠く丹波の国から別の従妹がやってきた。

「澪殿も、眠れぬのか？」

「枕を変えると、よく寝付けないものですから」

澪がそっと信親の脇に立った。

「ふだん俺は床に就けば、すぐに眠りに落ちるゆえ、枕について真面目に考えたことがなかったな。どんな枕が好きだ？」

「ずっと使っていた布張りの枕があったのですが、まさか枕なぞ持って逃げられませんもの」

地獄を見た澪は毎夜、悪夢に魘うなされているのか。

守ってやりたいと思った。

「よき枕がないか、実喰屋に掛け合ってみよう。その他、石谷家の方々に何ぞ不具合はないか」

ややあって、澪が沈黙を破った。

友よ 第6回

「どうして信親さまは、いつも他人のことで一生懸命なのですか？」
「他人？ そなたは従妹ではないか。石谷家は、母上のお身内だ」
「信親さまは讃岐攻めのおり、一畦ひとあぜごとに麦を薙なぐよう、御館おやかたさまに
進言されたとか」

「俺の心優しき友が考えついた妙策でな。麦も、川も、土も、皆のものだ。いづれ国を治めるなら、皆の笑顔のために骨を折らねばならぬ。俺はそのように教えられ、育てられてきた」

元親は信親のために、大河にも似た一本の王道を用意してくれた。幼き日から信親は、日々たゆまずその道だけを歩み続けてきた。道に外れる真似をしたことは、一度もない。

信親の振る舞いは誰に対しても常に正しく、美しくあり続けねばならぬ。それは、両親と師の教えであり、長宗我部の御曹司としての矜持でもあった。生涯、貫き通す。

漣がまっすぐに信親を見ていた。瞳に月影が宿っている。
恥ずかしげに目を伏せたりしないところが、漣らしかった。

「漣殿に見せてやりたいものを、何も捕まえてやれなんだな。……
ん？ ここで待っていてくれ」

そっと柵をまたぎ、森の中へ入った信親は、やがて両手を後うしろろに回しながら戻った。

「夜は草木に掴まって寝ておるゆえ、簡単に捕まえられる。見よ、大
トンボだ」

友よ 第6回

信親は隠していた手を前へ差し出した。

身をくねらせるトンボの体は中指ほどの太さで、翅はねを**広**げれば、溇の掌ほどもありそうだった。翅の付け根が赤い。

「いや……気持ち悪い」

溇は後ろへ退すっている。

「何だ。せっかく捕まえたのに。トンボよ、起こして済まなんだ」

「わたくしは、綺麗な草花や可愛らしい生き物が好きなのです」

「俺はこいつも可愛いと思うんだがな。まあいい。そろそろ逃がしてやらねば」

指を離すと、大トンボがさっと夜空へ舞い上がった。

「トンボは飛べるようになってから、ふた月ほどこしか生きられぬ。達者で暮らせよ」

虫の去った空にあるのは、月影だけだ。

ぼそりと隣で声が聞こえた。

「信親さまは、土佐で好きなものを見つけよと、仰せになりましたね」

「ああ、言った。仁淀川を好いてくれたか？」

溇は目に涙を浮かべながら、ゆっくりとかぶりを振った。

「いいえ。川よりももっと、好きで堪らないものができました」

「最初は川でなくともかまわぬ。で、何を好きになれた？」

「……秘密です」溇は肉厚の唇を頑固そうに結んでいる。

「やけに、もったいぶるのう。そなたも人が悪い」

友よ 第6回

「自分でも、素直でなくて、ひどく損をしていると思います」

「俺は昔から数々の習い事をこなしてきて、ひとつわかったことがある。学ぶときに一番大事なのは素直さだ。一番伸びる人間は——」

突然、漣が信親に抱きついてきた。

「な、何とした、漣殿？」

漣の体の震えが伝わってきた。泣いているらしい。

「土佐を嫌いになろうと、思ったのに……」

丹波で味わった悲劇を思い出しているのか。理由は定かでないが、腕の中で泣き続ける少女の背を、信親はそっと撫で続けた。



仁淀川から戻るや、信親は大手門近くの宗家の居館へ向かった。家人に鰻を手渡すと、石谷ノ方の部屋へ急いだ。朝方、突然倒れたとの知らせが波川へ届いたためだ。むろん、すぐに駆け付けた。

「母上、お加減はいかがでございまするか」

石谷ノ方こと滝は、褥しとねから半身を起こして、いつもの優しげな顔で微笑んでくれた。

信親にとって、昔の母は口うるさい女性だった。幼い頃から何度も「御曹司という恵まれた立場なればこそ、周りの者をいっそう気遣いなされ」と諭なされた。母の教えが体に染み付いたせいか、いつの間にか叱られなくなったのが寂しいくらいだった。石谷ノ方と行き違いがあったとすれば、後にも先にも、いこの件だけだ。

友よ 第6回

「心配を掛けて済みませぬ。でも、少し良くなったようです」
もともと滝はほっそりした体つきだが、見るからに窶やつれていた。顔色も良くはない。

「仁淀川の鰻を持って参りました。三蔵に料理させますゆえ、今宵にでも召し上がってください。資吉に食われぬよう守るのが大変でしたぞ」

滝の部屋の模様替えなど力仕事で、何度か資吉と三蔵を駆り出したことがある。

「礼を申します。わたくしも、元気を出さねばなりませんね」
病母の力ない笑みが、かえって信親を不安にさせる。

元親は常々「お前も、母上のごとき女性を妻とせよ」と言っていた。信親もそのつもりでいたが、るいも、漣も、結ばれえぬ相手だった。

話題作りでひとしきり仁淀川について語り、滝も熱心に聞いていたが、やがて沈黙が漂った。

「るいの件では、信親どのにすまぬことをしたと思っています」
思わぬ言葉に、母の顔を見た。

波川の乱の際に会って以来、るいは姿を見せなかった。信親の叔母に当たる清宗きよむねの正室は、岡豊に戻ってから落飾したが、るいを伴っていなかった。長宗我部が戦に明け暮れ、天下が激動し、誼みを結ぶべき大名を定めにくかった事情もあるが、るいとの失恋以来、三年余り、信親は結局誰も娶らず、浮いた話はひとつもなかった。

友よ 第6回

「もう、済んだ話でござる」

今さら、最愛の母を責める気など毛頭ない。

「るいのことを、まだ想っているのですか？」

嘘を吐かぬ信親は、心にもないことを言わぬようにしてきた。が、問いに対し、否定せず無言で目を逸らせば、内心を告白したようなものか。今でも、るいを忘れえぬのは、まだ恋しているからだろう。滝が重ねて問うてきた。

「るいに、お会いなさい」

覚えぬ母の顔を凝視した。滝は居場所を知っているのだ。

ややあってから、信親は言葉を選んだ。

「会わぬほうが良いと存じます。どこかで息災にしているのなら、それで構いませぬ」

不幸せな境涯に生まれた猫好きの女は、信親のせいで追放され、乱にまで巻き込まれた。今、穏やかな暮らしをしているのなら、それでいい。

「わたくしにできる限りのことは、するつもりです」

かつての侍女で、息子が恋した女性だから気に懸け、世話してくれているのだろう。信頼できる母に万事、任せればよい。

「母上。近々また、戦へ行って参ります」

信親は話題を変えた。生きて帰るつもりだが、またしばらく会えなくなる。

友よ 第6回

出陣に際し、滝は未練がましい言葉を一切口にせず、「ご武運をお祈りいたします」と典雅な物腰で送り出すが、生還するまでは雨の日も風の日も、毎朝必ず城北にある別宮八幡宮を参詣し、夫と子らの無事を熱心に祈っていることを、信親は知っていた。

まだ幼いころ、油照りの夏の真っ昼間、武芸の鍛錬に精を出しすぎた信親は、突然めまいを覚えて昏倒し、担ぎ込まれたことがあった。戦場では飲まず食わずで戦う時もあるからと、わざと渴きを我慢して稽古を続けていたため、ひどい暑気あたりに見舞われたのだった。

——わたくしは弥三郎どのが無事でいてくれるだけで、幸せなのです。

幼い信親を抱き締めながら、母は涙していたものだ。

「勝って、年内にも皆で戻って参ります。母上のお顔を長らく見ないでいると、父上の機嫌が悪うなって、長宗我部の士気に関わりませぬ」

笑いを誘ってみたが、この日滝は笑わず、寂しげな笑みを浮かべた。「初恋の女性を奪っておきながら身勝手な願いですけれど、信親どのがどのような奥方を娶るのか、この目で見ておきたい。孫を抱き上げるのは、無理でしょうけれど……」

信親は愕然とした。滝は死期が近いと悟っている。

戦での生死は天が決める話だが、嫁取りはやろうと思えばできる。

突然、滝が顔色を変え、口元を押さえた。

友よ 第6回

指の隙間から、鮮血がこぼれ出る。

「母上！ 誰かある！」

信親がとっさに母を抱き締めながら叫ぶと、さっと障子が開き、侍女たちが部屋へ駆け込んできた。



九

谷忠兵衛の前で、小男は親指を立てた両の握り拳を膝先の脇に置き、美しく膝退しつたいすると、恭しく頭を下げた。一点の非の打ち所もなく見事に剃り上げられた桑名の月代さかやきに向かって、忠兵衛はひとまず愚痴をこぼしてみた。

「長宗我部にとって、小さくない痛手じゃのう」

谷家の屋敷は他の家臣たちの住まいから離れていて不便だが、逆に密談には適していた。桑名を呼んだのは、また思わぬところで長宗我部の政略が狂ったからだ。

「面目次第もございませぬ。まさか、かような仕儀になろうとは……」

御曹司の縁組の話である。

信親が石谷家の娘、漣と恋に落ちたという。当主の義理の姪に当たる身内であり、政略上の意味は皆無だった。昨日、石谷ノ方から元親に相談があったという。

どこかの大家家の姫を信親の**正室**に興入れこしいさせしてしまえば話は早いのだが、日々激動する畿内の情勢が全く読めない中で、いかなる縁組をするかは極めて重要な決断だった。秀吉の評判を聞くにつけ、忠

友よ 第6回

兵衛は焦りを覚え、羽柴家ゆかりの娘を信親の正室として、これからの政争に備えたいと目論んできた。秀吉の重臣である蜂須賀正勝はちすかまさかつの娘に目を付け、すでに話を持ちかけてもいた。秀吉の養女としたうえで嫁いでくれるなら、長宗我部にとっては守り札の嫁になる。

「若のご気性なら、早めに手を打っておかねば、手遅れとなるう」
素性も知れぬ侍女でさえ、正室に迎えようとした若者だ。漣を側室とするのも認めまい。

この恋は、桑名が奔走してきた石谷家の厚遇が招いた結末である。困ったことに、若い二人の絆は深まる一方らしかった。

「ごもつとも」 桑名は礼儀正しく縮こまっている。
忠兵衛はもともと石谷家の迎え入れ自体に反対していた。長宗我部にとって、滅亡した明智家の遺臣と誼みを結ぶなど、政略上、大損と言ってよかった。

「先手を打って、娘のほうを誰ぞに嫁がせるか」
信親はまた失恋するわけだが、御曹司の宿命だと甘受してもらうほかない。たとえば谷家の嫡男が相手なら、釣り合いは取れよう。
「実は、大好物の羊羹をたくさん土産に持って、漣殿のもとを訪ね、この件につき、しかと話をいたしました。変わった女子で、父親の言うことも聞きませぬゆえ」

桑名はこれから弓の試合にでも臨むように真剣な顔つきである。
「手回しが良いな。して、首尾は？」

友よ 第6回

「なかなか芯の強い女子にて、簡単ではございませんでした。谷彦十郎殿なら如何かと持ち出しましたが、色よい返事はなく」

他人の息子を勝手に引き合いに出しておつてと、忠兵衛は内心不快だったが、顔には出さない。

「土佐家臣団の子弟でめぼしい若者を並べましたが、いずれも、否と」
「分を弁わきまえてもらわねばのう。されば、石谷殿に言い含めるほかあるまいて」

「いえ、拙者がお伺いする前に、漆殿のお心はすっかり決まっております」

桑名の声が震えている。

忠兵衛が見ると、桑名はうっすらと涙さえ浮かべていた。

「実に見上げた女子にございまする」



夏の夕暮れでもこの日は少し肌寒く、槍稽古に向いていた。

同居の資吉とも激しい鍛錬を続けてきた信親はもう、福留隼人とほぼ互角に渡り合える。ずいぶん強くなったのが自分でもわかった。片鎌槍で風を斬った時、荒い息遣いが出丸のすぐ下の小道から聞こえてきた。

「よい所へ来た、資吉。少し相手をしてくれ」

「稽古どころではありませんぞ、若」

どこぞから駆け付けてきた資吉の話に、信親は驚愕した。

友よ 第6回

「まことか！ 漣殿が落飾すると？」

資吉が城下へ好物の羊羹を買いに入ったところ、店の主人が噂していたという。

なぜだ。信親は滝に相談し、許されるなら漣との縁組を進めて欲しいと頼んであった。政略絡みでの頓挫は覚悟していたが、もしや忠兵衛あたりの指金か。

「まずは彦十郎に諮るとしよう」

信親は槍に覆いを付けると、さっそく同居人の部屋を訪ねた。

書物の山に埋もれながら話を聞いた彦十郎は、別段驚きを見せなかった。

「石谷家は主従落ちぶれて、何の力もありません。御曹司の正室には、畿内で覇を競う大名家ゆかりの姫を迎えるのが筋。漣殿のほうで事情を弁え、長宗我部のために身を引かれたのでござろう」

波川で信親にすぎりついて泣く漣の姿を思い出した。

「彦十郎、俺はどうすればよい？」

「何もなさいますな。これでよいのでござる」

「漣殿が……不憫ではないか」

「この一件、私は愚父と同じ意見でござる。長宗我部の御曹司が、川や恋にうつつを抜かしている間も、世は大きく動いており申す」

頭ではわかる。だが、本当にそれでよいのか。

「俺は弥次郎とお福たちを死なせてから、ずっと悔いていた。身近な

友よ 第6回

者さえ幸せにできぬ者が、国主として民を幸せにできようか」

話を打ち切るように、信親は立ち上がった。

庭へ駆け出る。

「資吉、まずは止めるぞ！ 漣殿はもう尼寺へ向かったのか？」

「おそらくは……若！ もしや、あれでは？」

資吉の指差す先、石清川の向こう岸に柳色の小袖が見えた。侍女をひとり、伴っている。

信親は即座に駆け出した。後ろに資吉が続く。

騒ぎを聞きつけた三蔵たちも従ってきた。

大橋まで回れば、見失うやも知れぬ。

迷わず信親は、ざぶんと石清川へ飛び込んだ。

そのまま裾を捲り上げて、渡り始める。資吉たちも続いた。

ざぶざぶと一斉に向かってくる若者たちの群れに、漣が気付いた。

呆気にとられた様子で、立ち尽くしている。

「漣殿、待たれよ！ 大事な話がある」

信親が叫ぶと、漣は何を思ったか、小走りに駆け始めた。

慌てて水の中を駆け出すと、流れに足を取られて、頭から川の中へ
ばしゃりと倒れこんだ。ふだん川で遊ぶ時は、袴など穿かぬ。脱ぐ間
も惜しく、信親は漣の名を呼びながら、そのまま渡り続けた。

渡り切ると、土手を駆け上がり、ほどなく漣に追いついた。

立ち止まろうとしない漣を、後ろから抱き止める。

友よ 第6回

「俺が呼んでおるのに、聞こえなかったのか？」

「聞こえたから、逃げたのです」

「なぜ逃げる？ 俺が嫌いか？」

「嫌いなら、ひっぱたいています。こんな無体な真似をされているのですから」

「すまぬ、俺としたことが、前後を忘れていた」

腕を離すと、漣がやおら振り向いた。

全身濡れた体で信親が抱き締めたせいで、漣の小袖もずぶ濡れだ。

「女子をびしょ濡れにしてまで大事なお話とは、何でございますか」

漣に問われて、信親ははたと困った。

みるみる顔が真っ赤になるのがわかった。

見つめ合っていると、ぴちよぴちよとしづくの落ちる音が、背後から幾つも聞こえてきた。

十数人の信親衆が、資吉を先頭に土手を上がってくる。

「若、間に合ってよかったですな。今日は少々寒うござる」

資吉はぶっきら棒にぼやいてから、大きなくさめをした。

「いかん、背筋が今、ぶるりとしたぞ。さ、帰りましょうぞ」

「まだ、漣殿との話は済んでおらぬ」

「されば早う、済まされませ」

信親を中心に、若者たちが半円を作った。これでは、ますます言いづらいではないか。

友よ 第6回

「澪殿、実はな。俺は……」 信親の口元を、皆が注視している。
「もうすぐ出陣せねばならぬ」

隣の資吉が声を上げて、**ずり**こけた。

「……はい」

ぐっと詰まった。

そのまま、信親はどうにも固まってしまった。面と向かってどう言
えば良いのだ。おまけに信親衆がゾロリと周りに揃っている。

石清川から吹いてくる夕風が、冷たい。

「戦場では鬼神の如き御曹司が困ったものじゃ。このままでは風邪
をひきますゆえ、主に代わって、拙者から申し上げる」

資吉は澪に向かって、巨体を恭うやうやしく折りたたんだ。

「若殿と夫婦おとめになってください、澪様」

そうなのだ。信親はがぜん勇気が出てきた。

「資吉の申したとおりだ。母上が俺の花嫁を見たいと仰っている。急
がねばならん」

「お言葉ながら、お断り申し上げます」

澪が信親に恭しく頭を下げる。

「な、なぜでござる？」

信親を差し置き、慌てて資吉が詰め寄った。

「長宗我部の御曹司が石谷の娘なぞ娶ったところで、一利もありません。貴家にとって、よりよき縁組をなされませ。あしからず」

友よ 第6回

一礼してぐるりと振り向いた小さな背を、信親は後ろから抱き締めた。

「身を引いて、誰の嫁にも行かずに落飾するのは、俺を想ってくれているからだろう？ 俺は澪殿を好きになった。夫婦になる理由は、それだけで十分だ」

澪はかぶりを振って、腕の中から抜け出ると、信親をまっすぐに見た。

「乱世では、好き合う男女が結ばれるわけではありませんせぬ。信親さまもよくご存知のはず」

馬の嘶いななきがし、大橋を渡ってきた一騎がこちらへ向かってくる。彦十郎だった。

「俺の知恵袋が来てくれた。きっと何か、手はあるはずだ」
ひらりと下馬した彦十郎が、二人に向かって不愛想に会釈した。

「俺は澪殿を妻としたい。彦十郎、策をくれ」
「長宗我部にとって、大事な道をひとつ、失いますぞ」

「澪殿は目に見えぬ力を持っている。きっと長宗我部を内から支えてくれるはずだ」

彦十郎は腕組みをしながら、暮れ空を見上げて思案していたが、やがて小さく頷いた。

「この足で御館様に直談判なされませ。石谷ノ方を喜ばせたいと仰せになれば、足り申す」

友よ 第6回

「……ただ、それだけか？」 信親は拍子抜けして、彦十郎を見た。「これまでの経緯いきさつに鑑かんがみてお許しになりました。ただし、急がれませ。私からも釘を刺しておきますが、うかうかしておれば、愚父が次の手を打ちかねませぬ」

「若、とにかく早うしてくだされ」

獰猛な猪か何かがするような、資吉の大きなくさめが数回続いた。まるで病が伝染したかのように、若者たちが次々とくさめをし始めた。

澁は堪えきれぬ様子で笑い出し、腹を抱えている。

釣られて信親も大笑いすると、彦十郎まで軽い笑みを見せた。

十一

「畏れながら、反対いたします。長宗我部にとって、この縁組は何の益もございませぬ」

忠兵衛の穏やかな口調には、カが込められていた。

——羽柴秀吉に対抗すべく、柴田勝家と手を組むべし。

石谷の進言を受け、元親は勝家との同盟を決断し、石谷を使者として北ノ庄城きたのしょうじょうへ遣わしていた。

清須会議きよすを経て、秀吉の優勢が伝えられる中、忠兵衛が強く異を唱えてきた。もしも秀吉が柴田に勝ち、畿内せいのちを席巻する事態ともなれば、長宗我部に再び危機が迫る。ゆえに、忠兵衛は秀吉との和親を説き、重臣の蜂須賀正勝との間で密かに縁組の話を進めてもいた。

友よ 第6回

しかるに、信親が漣と恋に落ちた。

石谷ノ方から縁組の打診があり、思案中のところへ、信親が室に迎えたいと元親に直談判してきた。「母上のような女性を妻としたい」という。本来なら側室とすれば済む話だが、信親の気性が絶対にそれを許さない。そのように育ててきたのは元親であり、長宗我部の家臣団だった。

「余は一度、信親の恋を潰した。哀れではないか」

「長宗我部のためでございます」

元親は、妻を通じて信親の初恋を断ち切り、親友の波川家を滅ぼした。表向きこそ孝行息子のままだが、父子の間には隙間風が吹いていた。以前は元親と酒を酌み交わし、最後まで付き合ってくれたものが、あれ以来、何かと理由をつけては中座するようになった。

るいと的一件以来、女子に見向きもしなかった信親が、初めて心を開いたのだ。

「先だつてと同様、石谷ノ方からお話あらば、若殿は必ず聞き分けられましょう」

信親は滝の病状を引き合いに出し、母を喜ばせたいとも語った。

滝があと一年保てば良いほうだと薬師は漏らしていた。信親とるいの間を引き裂いたことに、滝は心を痛めていた。先が長くないなら、愛息の祝言を見せてやりたかった。相思相愛の姪と結ばれるなら、滝は心から喜ぶ。

友よ 第6回

「以前、信親に尋ねられたことがある。父上は何のために政をしておられるのですか、と」

元親は真の心中を家臣に明かしていない。が、長い付き合いの忠兵衛には、もう見透かされている気がした。

元親は濃鼠こいねずの鉄扇てつせんで左掌をパシリと打った。

「新たな縁組が必要となれば、言い聞かせて離縁させればよからう」
信親の気性では難しかろうが、いざとなれば、死別させる手もないわけではない。

「……御館様がそこまで仰せなら、ご随意に」

忠兵衛が恭しく両手を突いた。

神に仕えていたせい、この男は、最後は聞き分けがいい。運を天に任せると決めているのかも知れない。

「滝のために、出陣前に急ぎ祝言をあげたいそうだ。桑名に手配させる。その後はいよいよ阿波攻めだ」

阿波の攻略を主に担当してきたのは元親の弟、香宗我部親泰で、すでに南部は攻略済みだった。今年のうち阿波を統一する。信親と遷の縁組はその予祝よしあぐとなろう。

元親は受け止めた鉄扇を、左手で握り込んだ。

(続く)